

現代におけるホスピタリティの意義探求と再考

—— 旧約・新約聖書における Biblical Hospitality の起源と本質的考察 ——

Exploring and Rethinking the Significance of Hospitality in Modern Times: Origins and Essential Considerations of Biblical Hospitality in Old & New Testaments

森川 幸紀雄

Yukio Morikawa

抄 録

本論の主旨及び目的は、現代のホスピタリティ業界（主にホテル、旅館、ブライダル、レストラン、テーマパーク、旅行、医療、教育など）において、「ホスピタリティ精神」はその業界の顧客満足度や評判を向上させるために欠かすことの出来ないファクターとなっている。それにも関わらず、「ホスピタリティ」が本来何を意味しているのか、どのような起源をもっているのかなどへの本質的考察は未だ十分なされていないとは言えない。そこで筆者は古代ギリシャでの「ホスピタリティ」の起源や Biblical Hospitality、すなわちユダヤ教主義（旧約聖書、原語はヘブル語、一部はアラム語）、キリスト教主義（新約聖書、原語はコイネー・ギリシャ語）に端を発する「おもてなし」に焦点をあて、その起源と本質を見極め現代におけるホスピタリティ精神の意義を探求、再考することである。

〔キーワード：Biblical Hospitality、ホスピタリティ、古代ギリシャ、ユダヤ教主義、キリスト教主義〕

1. 序論：先行研究及び歴史的・宗教的考察

現代のホスピタリティ業界において、ホスピタリティという言葉ほど本来的意義から離れて乱用されている言葉も多くない。またホスピタリティ業界を代表するホテルなどの旅行、宿泊業界やブライダル業界だけでなく、今では飲食、医療、教育業界でさえもその言葉をむやみに用い、従業員や学生の指針としその定着を目指している主体が多くある。しかし、それらの主体が言う「おもてなし」が、本来ホスピタリティという言葉が持つコンセプトやそれによって具現化されるものは全く違っているケースも多々あると言わざるを得ない。

例えば、ホスピタリティの教科書と言われる、林田(2018, p.28)では、「欧米で言うホスピタリティは、主に3つの要素が挙げられます。① Safety 安全であること、② Courtesy 心配りがあること、③ Amenity 快適であること」として、多くのホスピタリティ提供者に参考とされている。また日本の視点から新川(2006, p.48)では、「ホスピタリティを日本語に直せば『気配り』『おもてなし』です。分かりやすく言えば、お客様がして欲しいと思っっていることを事前に察知し、して差し上げることです。」と日本のおもてなし感について定義をしている。いずれにしろ、従来の日本でいうホスピタリティの範疇は「おもてなし、快適さ、心配り」という表面的な定義を抜け出すこと

が出来ていないのである。

またホスピタリティを提供する側の思考（マインド）について、洞口（2005、p.212）では、「それは客の心に優しい手を差し伸べる思いやりの心である。ホスピタリティ・マインドがなぜ重要なのかはまさにこの点にある。形にこだわるサービスではなく、客の心に響かせるサービスの実践こそが大切なのだ。」という定義をしている。この点においても、次章で詳細を考察していくが、本来ホスピタリティとは、古代ギリシャ世界、ユダヤ教世界、キリスト教世界に端を発し、無償による客人歓待などを示すものであるが、代価を要するサービスと混同され、用いられていることが多くある。このことは、拙著（2021、pp.18-28）下線部分は新たに筆者が追記し、以下のように再考している。

「ホスピタリティとサービスの用語の違いも以下のように簡略化（定義）した。前者は無償で提供され、目に見えない形（もしくは目立たない形、不可視的）で顧客に提供されるものとし、後者はそれとは違い、何かしら有償で、見える形（もしくは目立つ形、可視的）で顧客に提供されるものとした。例えば、一流ホテルにおいて、そのフロント従業員が数百人の顧客名と嗜好を覚えて、チェックインと同時にその好みの部屋の眺望、レイアウトの部屋を提供することは、ホスピタリティの一つといえる。

それに対して、夕方のスーパーへ買い物に行き、夜6時以降になると刺身が20%オフ割引となるなどは分かりやすく、……」というのは代価を払うサービスである。

また、サービス（service）という語源について追記しておくならば、ラテン語の *servus* が語源と言われている。この語は、本来「奴隷」や「戦利品を収奪した外国人」という意味がある。また奴隷を表す *servus* が名詞形 *servitium* として用いられ、現代英語の *service* になったと考えられている（塹江 2003、p.29）。このことから、現代においてその本来の言語が持つ起源や本質をしっかりと把握しつつ、歴史的考察を持つことが重要と言える。なぜならば、このサービスという語も歴史的には、サービスは奴隷的な側面があった考え、主人に「仕える」という意味から主従

関係において使われる行動について用いられていたのである。その為、サービスという言葉は古代から中世ヨーロッパ、そして世界において20世紀前半まで上下、主従関係が成立する両者の間になされる行為であった。

しかし現代においては、サービスを提供する側が同時にサービスを享受される側にもなり、必ずしも主従関係にある中でサービスが使われるとは言えなくなっているのである。特に72.57%以上の国民がサービス産業に従事しているという国々（2020 Graphochart）では、この状況は当然の変化ということが出来る。

これらに対して、欧米でのホスピタリティ定義などを見ると、Wikipedia（2022）“Hospitality”では、以下のように示され、定義している。

Hospitality is the relationship between a guest and a host, wherein the host receives the guest with some amount of goodwill, including the reception and entertainment of guests, visitors, or strangers.

「ホスピタリティはゲストとホストとの関係であり、ホストはある程度の善意をもってゲスト、訪問者、または見知らぬ人を受け入れ、歓待することである。」としている。

また The Oxford English Dictionary（1989）では、その定義を “the act or practice of being hospitable; the reception and entertainment of guests, visitors, or strangers, with liberality and good will.”

つまり、「客や訪問客、見知らぬ人に対して善意をもって行われる歓待、もてなしの行為と実践」と定義している。さらに Oxford Advanced Learner's Dictionary（2015）では、“friendly and generous behavior towards guests”や“food, drink or services that are provided by an organization for guests, customers, etc.”と定義している。

これら多くの場合 *guests*（客）は前もって予定している、または約束している客人を指し、*visitors*（訪問者または訪問客）は必ずしも予定していた客人ではない場合もあるし、望まれないで来る客もいる訪問客ということが出来る。筆者は、これらの「ホスピタリティ」の意味としてはいずれも歓待、歓迎、迎え入れるという「おもてなし」を意味するが、どれも本来の本質的な意味合いを表すには不十分と考える。そこに

ことが多い。これらの本質は寛大さ、贈り物の交換、相互主義に基づいた制度化された関係を示している。古代ギリシャでは歴史的に外国人や客人に対するもてなしは、道徳的義務として慣習化されていたのである。また、もてなしの儀式は、ホストと客人の間の相互関係を生み出し、物質的な利益(贈り物、危険からの保護、避難所など)と非物質的な利益(善意、特定の規範的権利など)の両者が示されていた。この言葉自体はゼノス「見知らぬ人」に由来し、ギリシャ神話の神ゼウスは、「見知らぬ人」の保護者としての役割を持つことから、ゼウスクセニオスと呼ばれることもあった。またテオクセニア (E: Theoxenia, G: θεοξένια) は、ギリシャ神話の中心的テーマであり、図1に見る「見知らぬ人」(クセノス、ξένος)³⁾をもてなすことこそが、人間の美德または敬虔さが表されると考えられていたのである。一連の物語は、あらゆるゲストが偽装された神であるかのように扱われるべきことを、当時の人間たちに警告し、古代ギリシャ世界の習慣としてクセニアの考えが定着、拡がっていくこととなったのである。

2. ユダヤ主義世界：旧約聖書にみる Biblical Hospitality の起源と考察

これまで述べてきたようにホスピタリティの起源はかなり古くからあったことが分かる。さらに本章では、ユダヤ主義世界におけるホスピタリティの起源を探求し、Biblical Hospitality の原点を旧約聖書(原語はヘブル語)から概説しておきたい。

世界三大宗教の一つユダヤ教は、主に旧約聖書最初の創世記のアブラム(後にアブラハム)とロトの事例に基づいて、「見知らぬ人」や「客人」へのもてなしを称賛していることを以下の箇所から見る事が出来る。

創世記18章1-8節(2022いのちのことば社)、もてなしに関する下線太字部分は筆者が加筆し強調している。

1、主は、マムレの櫪の木のところ、アブラハムに現れた。彼は、日の暑い頃、天幕の入り口に座っていた。2、彼が目を上げて見ると、なんと、3人の人が彼に向って立っていた。アブラハムは

それを見るなり彼らを迎えようと天幕の入り口から走って行き、地にひれ伏した。3、彼は言った。「主よ。もしもよろしければ、どうか、しもべのところを素通りなさないでください。4、水を少しばかり持ってこさせますから、足を洗って、この木の下でお休みください。5、私は食物を少し持って参ります。それで元気を付けて、それから旅をお続けください。せつかく、しもべのところをお通りになるのですから。」彼らは答えた。「あなたの言うとおりにしてください。」6、アブラハムは天幕のサラのところへ急いで行って、「早く、3セア⁴⁾の上等の小麦をこねて、パン菓子を作りなさい」と言った。7、そして、アブラハムは牛のところへ走って行き、やわらかくて、美味しそうな子牛を取り、若い者に渡した。若い者は手早くそれを料理した。8、それからアブラハムは凝乳と牛乳と、料理した子牛を持ってきて、彼らの前に出したので、彼らは食べた。彼自身は木の下で給仕をしていた。

この箇所には、ユダヤ教徒たちが信仰の父として崇めるアブラハムが、日中かなり厚くなり荒涼とした土地で、自ら旅人に走り寄って地にひれ伏しながら、自分のところで足を洗い、飲み物や休息と食事をするようにと懇願しているのである。また極上の子牛を屠り、旅人の食事とすることがいかに最大なもてなしを表していたかすぐに分かるのである。驚くべきことは、「見知らぬ人」である3人の旅人をもてなす主人であるアブラハム自身が僕のように給仕するものとなって食事を提供したことである。

創世記の次章19章においても、以下のようにアブラハムの甥であるロトも旅人をもてなしていることを見ることが出来る。

創世記19章1-4節(2022いのちのことば社)、もてなしに関する下線太字部分は筆者が加筆し強調している。

1、その二人のみ使いは、夕暮れにソドムに着いた。ロトはソドムの門のところへ座っていた。ロトは彼らを見ると、立ち上がって彼らを迎え、顔を地に伏し拜んだ。2、そして言った。「ご主人

がた。どうか、この僕の家に立ち寄り、足を洗って、お泊りください。そして、朝早く旅を続けて下さい。」すると彼らは言った。「いや、私達は広場に泊ろう。」3、しかし、ロトがしきりに勧めたので、彼らは彼のところに立ち寄り、家の中に入った。ロトは種無しのパンを焼き、彼らの為にごちそうを作った。こうして彼らは食事をした。

ここでもロトはアブラハムと同じく見知らぬ旅人に声をかけ、自分のところに来て、共に食事をし、宿泊をすることを地にひれ伏しながら拝み懇願している。

ヘブル語では、これらの習慣を *hachnasat orchim*、ヘブル語で *הכנסת אורחים* と呼び、「ゲストを歓迎する」「宿泊施設」という意味を持つ。また他の歓迎に加えて、その主人は客人に食物、快適さ、娯楽をも提供することが期待されていたのである。ここで信仰の父と呼ばれるアブラハムは主に3つのことを提供しているのである。それらは *Achila* (*feeding* : 食事)、*Shtiya* (*drinking* : 飲料)、*Linah* (*lodging* : 宿泊場所) である。

また更に、多くの宗教的な規定、捧げものについて詳述して教えているレビ記においても、寄留者(見知らぬ人、異国人)をどのように接するべきかを教えているのである。

レビ記19章33-34節(2022 いのちのことば社)、もてなしに関する下線太字部分は筆者が加筆し強調している。

33、あなた方の国、あなたのところに寄留者が滞在しているなら、その人を虐げてはならない。
34、あなた方と共にいる寄留者は、あなた方にとって、自分たちの国で生まれた一人のようになければならない。あなたはその人を自分自身の様に愛さなければならない。あなた方も、かつてエジプトの地では寄留の民だったからである。わたしはあなたの神、主である。

ここに出てくる寄留者という言葉こそが、古代ギリシャにおいても述べたクセノス(*ξένος*) そのものなのである。

続いて申命記10章17-19節でも(2022 いのちのことば社)、もてなしに関する下線太字部分は筆者が加筆

し強調している。

17、あなた方の神、主は神の神、主の主、偉大で力があり、恐ろしい神。えこひいきをせず、賄賂を取らず、18、みなしごや、やもめの為に裁きを行い、寄留者を愛して、これに食物と衣服を与えられる。19、あなた方は寄留者を愛しなさい。あなた方もエジプトの地で寄留の民だったからである。

これらの行為は、ユダヤ主義世界では旧約聖書に見られる美德であり、現代においてもユダヤ教徒の間で見ることがある。またその他の例として、訪問者の足を洗うことや平和のキスなどの習慣がある(2001 Walter, 1996 Lawrence & Keith)。旧約聖書に基づくこれらの「見知らぬ人」「旅人」へのもてなし、対応は一部の欧米諸国ではこれらの宗教的習慣を受け継ぎ、移民のためのホスト文化さえも発展させてきたのである。

前述してきた旧約聖書に見られる「もてなし」に関する例は、いずれにしても、ユダヤ主義世界において、「見知らぬ人」「旅人」「寄留者」たちをよくもてなすことが極めて重要なことであることを示している。また、これはユダヤ主義の根幹である旧約聖書及びキリスト教精神の根幹である新約聖書共に、「愛」と「隣人」の考えとその実践に基づく故である。その意味では、単に無償のもてなしや接遇だけでは「ホスピタリティ」と言わず、そこに「愛」と「隣人」という思いと実行が伴って始めて、本来の *Biblical Hospitality* に近づくものと言えるのである。

この点については、次章のキリスト教精神の土台である新約聖書から *Biblical Hospitality* について考えていきたい。

3. キリスト教精神：新約聖書にみる *Biblical Hospitality* の起源と考察

本章においては、新約聖書(原語はギリシャ語)を中心にキリスト教における「おもてなし」について、つまり *Biblical Hospitality* の起源とその用法、本質的な意味を探求していきたい。そのためには、まず前章で論じた最後の部分での「愛(E: *agape*, G: *ἀγάπη*)」と「隣人(E: *neighbor*, G: *γείτονας*)」の定義につい

て、理解しておく必要がある。なぜなら、これらの概念は一般的に日本人が考える定義と大きく異なり、Hospitality を用いる時に度々誤解をしているからである。

言うまでもなくキリスト教の神髄とも言うべきものは、「愛」であるが、新約聖書が書かれたギリシャ語では、以下のように大きく分けて3つの言語で示される。

①アガペー (E: agape, G: αγάπη) は、最も新約聖書では多く使われており、220回出てくる。これは「たとえあなたが〜であっても、愛する」という無条件の愛、無償の愛であり、絶対愛、自己犠牲の愛と呼ばれている。この点について、『新約聖書 ギリシャ語小辞典』(1964 織田編)では、こよなく大事にすること、(積極的、肯定的) 尊重としている。

つまり、アガペーは主体が価値判断、道徳的判断によって対象を主体的に積極的に選び尊重する愛、ただし、ここで言う価値判断とは、その対象が「自分にとって利用価値がある」ゆえに愛することを言うのではなく、それに関わりなく「汝価値あり」と主体的に判断することを言う (pp.2-3)。

②フィーリア (E: philia, G: φιλία) は、第2番目に上位な愛であり、聖書の中では22回用いられている。これは通常友愛、兄弟愛、条件付きの愛などと訳される。人情としての愛をも含めるものと定義される。

③エロス (E: eros, G: Έρως) である。聖書の中では1回も使われておらず、通常男女間の恋愛 (1964 織田編)、自己愛、奪う愛などに使われることが多い。

上記の①アガペーと②フィーリアの使い分けとして最も良く知られ、ギリシャ語学習にも使われるテキストとして有名な箇所は、ヨハネの福音書21章15-17節 (1987 日本聖書刊行会『聖書』新改訳 第2版) である。下線太字部分は筆者が加筆しギリシャ語原語の意味する単語の発音をカタカナ表記で説明した。

15、彼らが食事を済ませた時、イエスはシモン・ペテロに言われた。「ヨハネの子シモン。あなたは人たち以上に、わたし⁽⁵⁾を愛します (アガペーの動詞形アガパオー) か。ペテロはイエスに言った。「はい。主よ。私があなただを愛する (フィーリアの動詞形フィレオー) ことは、あな

たがご存じです。」 イエスは彼に言われた。「わたしの小羊を飼いなさい。」 16、イエスは再び彼に言われた。「ヨハネの子シモン。あなたはわたしを愛します (アガパオー) か。」 ペテロはイエスに言った。「はい。主よ。私があなただを愛する (フィレオー) ことは、あなただがご存じです。」 イエスは彼に言われた。「わたしの羊を牧しなさい。」 17、イエスは三度ペテロに言われた。「ヨハネの子シモン。あなたはわたしを愛します (フィレオー) か。」と言われたので、心を痛めてイエスに言った。「主よ。あなたは一切のことをご存じです。あなたは、私があなただを愛することを知っておいでになります。」 イエスは彼に言われた。「わたしの羊を飼いなさい。」

またもう一つの重要な概念である「隣人 (E: neighbor, G: γείτονας)」の定義について、聖書の中では、旧約聖書ではレビ記19章18節 (2022 いのちのことば社) で、以下のように用いられている。

復讐してはならない。民の人々に恨みを抱いてはならない。自分自身を愛するように隣人を愛しなさい。

とある。旧約聖書における「隣人」の定義は、その者の出生の優劣に関わらず、家族、親戚、同胞ユダヤ人であったと考えるのが一般的解釈である。しかしながら、その考えを打ち破り、ユダヤ主義世界に新たな「隣人」の教えをもたらしたのは、言うまでもなくイエス・キリストなのである。そのことを明らかにした聖書箇所が、ルカの福音書10章25-37節 (2022 いのちのことば社) に言及されている。「ルカの福音書」はギリシャ人の医師であるルカにより記述され、非常に体系的に延べ伝えられている為に、多くの聖書研究に用いられる福音書である。そこではユダヤの律法学者とイエスとの問答がなされ、ユダヤ教の律法 (旧約) の集約とも言うべき教えが以下のように記述されている。

25、さて、ある律法の専門家が立ち上がり、イエスを試みようとして言った。「先生。何をしたら、永遠のいのちを受け継ぐことが出来るでしょうか。」 26、イエスは彼に言われた。「律法には何

と書いてありますか。あなたはどう読んでいますか。」27、すると彼は答えた。「あなたは心を尽くし、命を尽くし、力を尽くし、知性を尽くして、あなたの神、主を愛しなさい。」、また「あなたの隣人を自分自身のように愛しなさい」とあります。28、イエスは言われた。「あなたの答えは正しい。それを実行しなさい。そうすれば、いのちを得ます。」29、しかし彼は、自分が正しいことを示そうとしてイエスに言った。「では、私の隣人とは誰ですか。」30、イエスは答えられた。「ある人が、エルサレムからエリコへ下って行ったが、強盗に襲われた。強盗達はその人の着ているものをはぎ取り、殴りつけ、半殺しにしたまま立ち去った。31、たまたま祭司が一人、その道を下って来たが、彼を見ると反対側を通り過ぎて行った。32、同じようにレビ人も、その場所に来て彼を見ると、反対側を通り過ぎて行った。33、ところが、旅をしていた一人のサマリア人は、その人のところに来ると、見てかわいそうに思った。34、そして近寄って、傷にオリーブ油とぶどう酒を注いで包帯をし、自分の家畜に載せて宿屋に連れて行って介抱した。35、次の日、彼はデナリ2枚⁽⁶⁾を取り出し、宿屋の主人に渡して言った。「介抱してあげて下さい。もっと費用が掛かったら、私が帰りに払います。」36、この3人の中で誰が、強盗に襲われた人の隣人になったと思いますか。」37、彼は言った。「その人に哀れみ深い行いをした人です。」するとイエスは言われた。「あなたも行って、同じようにしなさい。」

この「良きサマリア人」の話は有名であるが、ここでは、従来のユダヤ教（律法）で考えられていた隣人の概念よりも広く、すべて自分が関わりを持つ隣人は寄留者、旅人、異邦人などでさえも、自分と同様に愛する対象とされることを教えているのである。これこそが、キリスト教世界で最も重要な新約聖書の教えを集約している命令の一つなのである。

そして、サマリア人という宗教的、文化的にユダヤ人から軽蔑されていた中で、敵対していたユダヤ人に近寄り、傷にオリーブ油（消毒）を塗り、ぶどう酒（消毒）を注ぎ、包帯（救急処置）をしたのである。それだけでなく、当時その道を下ることは非常に危険が伴っていたにも関わらず、自分の家畜に載せて宿屋

まで運び、宿屋の主人に介抱してくれることを願って、その費用デナリ2枚（当時の一日分の労賃約2日分）を渡したのである。この記事についての詳述は、本論の目的からそれてしまう為に、次の機会にゆだねたい。

ここからは、キリスト教世界（新約聖書）における Biblical Hospitality を考察するうえで、特に重要なこの2つの単語、「愛（E: agape, G: ἀγάπη）」と「隣人（E: neighbor, G: γείτονας）」を土台として以下に考察をしていくこととする。

またルカの福音書10章38-40節（2022 いのちのこことば社）、もてなしに関する部分、補足が必要な部分については、筆者が**下線太字**部分を追記した。

38、さて、一行が進んでいくうちに、イエスはある村に入られた。すると、マルタという女の人がイエスを家に迎え入れた。39、彼女にはマリアという姉妹がいたが、主の足元に座って、主のことに聞き入っていた。40、ところが、マルタはいろいろな**もてなしのため**に心が落ち着かず、**(イエスの)**みもとに来て言った。「主よ。私の姉妹が私だけに**もてなしをさせている**のを、何とも思わないのですか。私の手伝いをするように、おっしゃってください。41、主は答えられた。「マルタ、マルタ、あなたはいろいろなことを思い煩って、心乱しています。42、しかし、必要なことは一つだけです。マリアはその良い方を選びました。それが彼女から取り上げられることはありません。」

この記事も新約聖書の中では、大変有名な記事であるが、元来の「もてなし」の根底にあるもの、心遣いについて教えられている。もともと、イエスはこの姉妹たちのところ（ベタニア村）へ行き、そこで食事や話をよくしていたようである。またイエスが来られることを知ったマルタ、マリアは喜んで（1987 日本聖書刊行会）『聖書 新改訳』第2版新改訳）では「喜んで」という単語が入っている。ところが、時間がたつにつれて「客人たち」をもてなすことに忙しくなり、マルタは手伝いも奉仕も何もせず、イエスの話に聞き入っているマリアのことが気になり始めたのである。そこで、さらにマルタはいろいろなもてなしの

ために、「気が落ち着かず」（新改訳）または「割り込んで来て（*επιστάδα*）」（2006 尾山：p.484現代訳）、となったのである。この単語は、「暴れこんで来る」という意味を持つ単語であり、非常に強い不満を表しているのである。それに対してイエスは、「あなたはいろいろなことを心配して、気を遣っている。どうしても必要なことは一つ（大事な話を聴くこと）である。」と教え諭したのである。

またここでは「いろいろなもてなし」という単語は英語訳では“much serving”が使われ、「もてなし」には単に“serving（*σερβίσιμα*）”が使われている。前述したがこれは「奴隷」に端を発するサービス（*service*）からの派生であり、元々は奉仕（仕えること）を指す単語である。自発的奉仕を意味し、この文脈により適切な語としては、食卓の給仕の務め、奉仕の務め、援助を表す *deakonia*（*διακονία*）が適切であると考えられる（1964 織田編）。この記事からは、時として「客人」をもてなす主人（ホスト）や接客なども、最初は喜んで迎えたにもかかわらず、多忙を極めて切羽詰まり時間を気にし始めると、途端に愚痴が出て「気が落ち着かない」状態になってしまうのである。このことからみると、もてなしの最初の段階は「愛」による気持ちで迎える大切さ、そしてそれを継続しつつホスピタリティ精神を忘れずに、目の前にいるもてなすべき「客人」「見知らぬ人」「旅人」などに必要なもの（飲料、食料、宿泊など）を提供し続けることである。

新約聖書には、ホスピタリティ（もてなし）に言及している箇所が他にもたくさんあるが、紙面の制約上最後に特徴的な箇所だけを挙げておきたい。

ローマ人への手紙12章13節では、「聖徒の入用に協力し、旅人をもてなしなさい。」（日本聖書刊行会1987、筆者がもてなしの箇所を下線太字としている）とある。これは古代ユダヤの時代から一貫した旅人、巡礼者などをもてなすという宗教的な習慣でもあるが、ホスピタリティ精神の表れである。「もてなす」というギリシャ語の原語は *φιλοξενία*（Eberhard Nestle, Erwin Nestle, Kurt Aland 1957, p.417）が用いられ、英語訳ではまさに *Hospitality* が使われているのである。ここでも *Biblical Hospitality* の神髄が述べられていることが分かる。そして、これまで詳述してきたように、無償で「旅人をもてなす」「客人をもてなす」という概念は、新約聖書においても一貫した欠かすこと

の出来ない行為なのである。

4. 結論

これまで本論において古代ギリシャ世界や旧約聖書にその信仰の土台を置くユダヤ主義、そして新約聖書の価値観を土台とするキリスト教世界、さらにそこから発展してきたホスピタリティの起源を言語や文化基盤である宗教的側面から詳述してきた（表1）。そこで明らかとなったのは、ホスピタリティ精神の本質は、キリスト教世界でいう「愛」があつて初めて成り立ち、ただ単にホスピタリティ＝「おもてなし」や「心遣い」と考え結び付けることには無理があり、極めて表層的であると言わざるを得ない。

また、その対象者としての「隣人」という概念も、家族、親戚たちから、さらに友人、知人へと拡がり、キリスト教世界での *Biblical Hospitality* をもっと適用するならばホテル、旅館、それ以外の業種においても店に来る顧客に対してだけでなく、その場に関わるすべての人に提供されるものと言える。現在の日本の医療、介護現場（病院、ホスピス、介護施設など）や教育現場などでも関わるすべての人「見知らぬ人」「旅人」「異国人」「異邦人（聖書ではユダヤ人以外の民族を指し、特別な意味を持つ人たち）」さえもが、隣人と考えられホスピタリティを提供すべき対象であるということを認識する必要がある。

筆者は、現在ホスピタリティ産業における多くの企業、ホテル、旅館、ブライダル、レストラン、テーマパーク、医療、教育現場などでさえも、ホスピタリティ＝「おもてなし」「心配り」とその一面だけをとりあげて短絡的に結び付けてしまっている感があると考えてきた。またそれは従来の日本でいうホスピタリティの範疇は、本来の宗教的意味合いやその起源を軽視し、「おもてなし」「快適さ」「心配り」という表面的な定義によるものが多いと述べてきた。また将来的に日本で本当の意味でのホスピタリティ精神が、社会全体で発展、周知、定着できるかが、今後のホスピタリティ業界で重要となると考えられる。そして *Biblical Hospitality* に由来するホスピタリティ精神の土台が認識され、実践されていく時に、はじめて日本のホスピタリティ産業において、本質的なホスピタリティ精神に基づいた「おもてなし」がなされると考えている。またそれらの適用方法と詳述については、今後の研究課題として

表1 古代ギリシャのホスピタリティ、Biblical Hospitality、日本のおもてなしの関連用語比較と本質的意味

	ホスピタリティ関連語	ホスピタリティの起源及び本質的な意味
古代ギリシャ世界における、「もてなし」の関連語と起源、意味	ξενία θεοξενία ξένος	もてなしは、「ゲスト」と「ホスト」の相互関係により生まれる。物質的な利益と非物質的な利益に分けられ、「見知らぬ人（クセノス）」をもてなすことはゼウスの化身のごとく扱うことであると考えられていた。
ユダヤ主義（旧約聖書）における、「もてなし」の関連語と起源、意味	hachnasat orchim Achila (feeding) Shtiya (drinking) Linah (lodging)	本来は民族や宗教に関係なく広く「見知らぬ人」「旅人」「隣人」に対して飲食、宿の提供をすることである。しかし、中間時代（旧新約の間の時代）から紀元前後に形骸化し、かなり限定的な家族、親戚、同族を対象としたおもてなしを指すことに変化した。
キリスト教（新約聖書）における、「もてなし」の関連語と起源、意味	Αγάπη γείτονας σερβίσιμα διακονία hospital hospice ⁽⁷⁾ hospitable hotel, hostel	ユダヤ主義、旧約聖書に見られる本来のおもてなし提供を勧め、それらをさらに発展させている。また「隣人愛」に基づき、その定義を拡大し、ユダヤ主義に見られるように同族、同胞だけではなく、「見知らぬ人」「旅人」「客人」「病人」などに対する「愛」と「隣人」の概念を土台とした「おもてなし」を意味するようになる。飲食、宿泊、医療、金銭などの提供をも含める。
日本的「もてなし」の関連語と起源、意味	おもてなし、もてなし、接遇、接待、歓待、心遣いなど。	「異人歓待」「まるうと」「まるうと」「まらひと」「まればと」など稀に訪れる客。「表裏（おもてうら）なし」からの派生による「おもてなし」などが起源となっている。鬼、天狗、河童など想像上のものをもてなす伝承などもある。

(筆者作成)

おきたい。

注釈

- (1) 古代ギリシャとは、北東地中海に存在したギリシャ文明をさし、紀元前12～9世紀の暗黒時代から古典時代（紀元約600年の終わり）までと本論では定義している。新約聖書が記述されたギリシャ語はホメロス、プラトン、ヘロドトス等の古典ギリシャ語と異なり、ヘレニズム時代（紀元前336～30年）からローマ帝政時代にかけて、地中海周辺から遠くペルシャの山奥までの広い地域にわたり、世界語となったコイネー・ギリシャ語である。また当時の共通語となったギリシャ語をヘレニズム・ギリシャ語、またはコイネーとも言う。従って一般的にコイネーという場合は、このヘレニズム・ギリシャ語を言うのであって、それ以前の方言群において生じていた諸コイネーを言うのではない（1971 岩隈）。
- (2) クセニア（E: Xenia, G: ξενία）は、そのギリシャ語原語の意味は織田昭編（1964）『新約聖書 ギリシャ語小辞典』p.230によると、（客を）もてなすこと。またそのもてなす場所、宿を指す。
- (3) クセノス（E: Xenos, G: ξένος）は、そのギリシャ語原語の意味は織田昭編（1964）『新約聖書 ギリシャ語小辞典』p.230によると、主に以下を意味する。
 - ① 異国の、外国の、よその、旅先（外国）にいる：見慣れない、聞き慣れない、今まで知らなかった、はじめての、珍しい、から疎開された、に無縁の、に不案内の、に無知の、を知らぬ。
 - ② (a) 外国人、異国人、外国にいる人、旅先（見知らぬ土地）にいる人、住んではいるが市民権や保護される特権のない者を指すが、(b) 客、客人：1964年版のギリシャ・ユースホテル協会発行のパンフレットによれば、「不案内な旅人 stranger とも

てなされるべき客人 guest とを古来同一の単語で表す国語はギリシャ語だけである」と記述されている。(C) また客を迎えて親切を尽くす人、主人、家主を意味する。この点でも主人と客人を同一して示す言語としてはギリシャ語だけである。

- (4) 1セアは約7.3リットル。
- (5) 聖書の中では、イエス・キリストがご自身のことを指して言う時、いつも「わたし」が用いられ、神であり受肉した人として、他の弟子たち、群衆、人々を表す「私」という表記と区別して使われている。
- (6) 一デナリ（E: denarii, G: δηνάρια）は、当時の労働者の一日分の労賃に相当する。
- (7) hospice は19世紀頃に英語になり、今では癌などの末期患者の心身の苦痛を緩和、軽減する施設を指す。

主要参考・引用文献

Eberhard Nestle, Erwin Nestle, Kurt Aland (1957), Novum Testamentum Graece, Privileg. Wurttemberg, Biblanstalt Stuttgart. p.417.

Lawrence Cunningham, Keith J. Egan (1996), Christian Spirituality: Themes from the Tradition, Paulist Press, USA, p.196.

Oxford Advanced Learner's Dictionary (2015), 9th edition.

Steve Reece (1993) The Stranger's Welcome: Oral Theory and the Aesthetics of the Homeric Hospitality Scene (Ann Arbor: University of Michigan Press) catalogues the various expectations of host and guest in Homeric Greek society.

Takabayashi Shigeru (2002) Kenkyusya's New English-Japanese Dictionary. 6th edition.

The Oxford English Dictionary (1989) Clarendon Press, 2nd edition.

Walter A. Elwell (2001), Evangelical Dictionary of Theology, Baker Academic, USA, 2001, p. 458.

World Bank (2020) International Labour Organization, ILOSTAT database, Data 1991～2020.

Zondervan Publishing House (1988) “The Holy Bible” New International Version, The Zondervan Corporation.

新川義弘 (2006) 『愛されるサービス』 かんき出版、p.48.

いのちのことば社 (2010) 『新改訳 新約聖書 和英対訳』 第3版
新日本聖書刊行会.

いのちのことば社 (2022) 『バイリンガル聖書』 新改訳2017年版、
ESV.

一般財団法人 日本ホテル教育センター (2020) 改訂版 『ホテルビ
ジネス 基礎編』.

岩隈 直 (1971) 『新約ギリシャ語辞典』 山本書店.

織田 昭編 (1964) 『新約聖書 ギリシャ語小辞典』 大阪聖書学院.

尾山令仁 (1991) 『創世記』 第6版 羊群社.

尾山令二 (2006) 『ルカの福音書』 初版 羊群社、p.484.

関根正雄訳 (1997) 『旧約聖書』 株式会社教文館.

徳江順一郎 (2019) 『ホスピタリティ・マネジメント』 第2版 同
文館出版、pp.17-30.

日本聖書刊行会 (1987) 『聖書 新改訳』 第2版 新改訳聖書刊行
会.

日本基督教議会議『キリスト教大辞典 改訂新版』 教文館.

服部勝人 (1994) 『新概念としてのホスピタリティ・マネジメント』
学術選書.

林田正光 (2018) 『ホスピタリティの教科書』 第12版 株式会社あ
さ出版、p.28.

塹江 隆 (2003) 『ホスピタリティと観光産業』 文理閣、p.29

洞口光由 (2005) 『5つ星のサービス・マインド』 文芸社、p.212.

松平千秋訳 (1994) 『ホメロス オデュッセイア 上・下』 岩波書
店.

望月初男 (2018) 『ギリシャ語直訳新約聖書』 初版 金の器社.

森川幸紀雄 (2021) 「ホスピタリティ業界研究」 講義における混合
授業スタイル実践 ～講義担当教員からの現状と課題の提示～
日本観光ホスピタリティ教育学会 第14号、pp.18-28.

電子メディア情報

Graphtochart (グラフで見る日本のサービス産業の雇用割合) 2022
<https://graphtochart.com/social-protection-&-labor/japan-employment-in-services-of-total-employment-modeled-ilo-estimate>. 閲覧日2022年8月16日.

Merriam-Webster dictionary (2022) “hospitality” [Hospitality Definition & Meaning - Merriam-Webster](#) 閲覧日2022年8月15日.

Wikipedia (2022) “Hospitality” [Hospitality - Wikipedia](#) 閲覧日2022年8月15日.